若手教員の指導力向上に向けた考察
― 校長による肯定的な言葉がけの記録を通して ―

服 部 直 美 ・ 渡 邉 賢 二

要旨：本研究では，若手教員が教職にやりがいを感じ，自信をもって授業や学級経営が実践できるために校長による効果的な支援及び指導方法を検討する．教員の病気休暇の取得及び早期離職の防止に向けて，日々の取組において，若手教員が自己肯定感を高め，自身の実践に自信を持つことできれば，若手教員が教職にやりがいを感じるようになると仮定した．方法として，第１筆者が対象者と定期的な面談を用い，その際，必ず肯定的な言葉をかけることを１年を通して実施し，対象者の変容を観察した．面談で対象者が発した言葉より，１学期は，自信のなさを表す言葉が目立っていた．しかし，２学期には，プラスの感情を表す言葉や，向上を目指す言葉，子どもを肯定的にみる言葉が発せられるようになり，３学期には，やりがいにつながる言葉が聞かれた．また，関係者からの聞き取りにおいても，１年後の対象者について，自信や貢献に関連する言葉が聞かれた．これらの結果から，管理職から定期的に常に肯定的な言葉をかけることが，若手教員の自信と意欲につながることが明らかになった．

キーワード：肯定的な言葉がけ，校長，指導力，若手教員

１．問題と目的

現在，教育現場では，小学校においても中学校においても教員の仕事内容が複雑化している．授業実践における教材研究や学級経営，部活指導，児童生徒の安全管理にとどまらず，いじめや不登校，暴力行為といった課題対応や保護者対応，地域との連携に加え，最近ではSNS上でのトラブルも増えるなど，様々な場面で迅速かつ適切で柔軟な対応が求められる状況にある（国立教育研究所，1999；片倉・三上，2021）．経験を重ねたベテラン教員であっても対応が難しい事例も多くあると言われている．

このような中，教員全体はもちろんのこと，若手教員も，初めて遭遇する課題の対応に悩み，行き詰まりを感じ，自信を失くしたり，指導力不足を感じたりし，その結果，就職して病気休暇を取得せざるを得ない状況，または離職をする状況が増えている（文部科学省，2021）．このことは，教育現場にとって危機的状況であると考えられる．

第１筆者が以前に勤務していた学校において，採用５年以下の若手教員10名に聞き取り調査を行ったところ，若手教員が周囲に支援や指導を求めたい場面は，対応に苦慮する場面，あるいは日頃の実践において改善が必要であると感じていてもその方策がわからないという場面であった．また，叱咤だけではなく，丁寧かつ的確な指導を求めているということも語られた．これらより，若手教員の病気休暇取得及び早期離職を防止し，若手教員が教職にやりがいを感じることができるためには，若手教員を支える環境を整備すること，すなわち同僚の協力と管理職の適切な支援と指導が不可欠であると考えられる．

以上のことにより，本研究では，管理職と若手教員との毎日の関わりから，若手教員が教職にやりがいを感じ，自信をもって授業や学級経営を実践できるために効果的な管理職による支援及び指導方法を検討する．

２．方法

（１）調査対象者

小学校教員Ａ（以下Ａとする）

・20代で，採用されてから５年以下である．中

学年の担任をしている．

・学校は中規模校で各学年複数学級である．教職員数は25名ほどである．

前年度，ミドルリーダーである教員と相担任を組み，手本となる実践を学んだ．時間を惜しまず教材について研究したり，可能な限り子どもとともに過ごす時間を生み出したり，先輩教員の助言に素直に耳を傾けたりするなど積極的に業務に取り組み，指導力の向上に努める姿が見られた．しかし，２学期に学級児童間のトラブルが発生した際，その収拾や保護者対応に苦慮し，相担任や生徒指導担当，管理職がサポートに入ったことと，Ａが自身の事前対応の甘さを反省し，該当の子どもに働きかけたことにより解決に至ったが，この件以降，自信をなくし，表情も曇りがちになった．

（２）調査期間

20XX年４月１日～翌年３月31日までの１年間

（３）調査方法

管理職が指導した内容をＡが即時に実践に生かせることと，またＡの自己肯定感を高め，意欲向上につなげることを目的に，以下の方法で実施する．

・毎日教室を巡回する．授業を週に１回観察する．２週間に１回程度，同僚教員の授業を参観する機会を与える．校内での全体研修においては，必ず発言の機会を与える．校務分掌については気づいたことを伝える．

・Ａの自己肯定感を高めるため，必ず良い点に着目し，指導場面では肯定的な言葉で助言する．

・放課後に行う対象者との面談で意識した，肯定的な助言の記録を中心におおよそ１週ごとに記録を整理する．

（４）変容の確認

・Ａとの面談

・同僚教員（教頭，相担任，関係教員），保護者，地域ボランティアへの聞き取り

（５）倫理的配慮

本事例の執筆と公表について，第１筆者が本人に承諾を得た．また，事例の記述については個人が特定されないように配慮した．

３．結果

（１）指導経過

①　１学期　学級での授業実践を中心とした観察

４月第１週

職員会議において，本年度の経営方針を発表し，教職員の校務分掌を決定した．研修部からは，学級開きを含む黄金の１週間と言われる新学期始めが大切であることの説明があった．それに加え，第１筆者からＡを含む５年目以下の若手教員６名に，求める教師像と，失敗を恐れず挑戦してほしいこと，常に謙虚で誠実であってほしい旨を伝えた．

４月第２週

学級開きにおいては，１年間どんな学級にしていきたいか，自分の言葉で思いをはきはきとわかりやすく伝えることができていた．子どもたちも真剣に聞き入っていた．

新学期最初の教科授業は社会科であった．固い表情で教壇に立ち，子どもたちにも笑顔は見受けられなかった．放課後の面談で，まずＡから授業の感想や授業に入る前の準備について説明を受けた．最初の授業であったため，気合が入りすぎて事前に準備した内容を全て教えなければいけないと焦り，子どもの様子を確認せず授業を進めてしまったとのことであった．第１筆者は，準備が周到であったこと，子どもたちに教えたいという意欲が感じられたことを伝えた．

４月第３週

国語科の授業を観察する．授業が始まり２週目となり，初日に比べると肩の力も抜けて表情も柔らかくなっていた．

放課後の面談において，Ａからは，今日は予想していたよりもスムーズにいったが，板書に時間を取りすぎてしまい，机間巡視が十分に出来なかったという反省があった．

第１筆者は，授業の最初に行った漢字の練習について，学年が上がるごとに画数も増え難しくなるが，今日は漢字の成り立ちと書き順の説明を簡潔に行い，空書きでは，テンポも考えた大きな動作で，子どもたちから見ても真似しやすく，全員が取り組むことができていたことを伝えた．

4月第4～5週

体育科の授業を観察する．校庭でのドッジボールであった．

放課後の面談で，Aから授業についての説明を受ける．Aには，今年度初めての校庭で授業であったため，まずは楽しいと感じさせたいという思いがあった．しかし，集合に手間がかかり過ぎてドッジボールの時間が少なくなってしまったこと，チーム分けにおいて苦手意識をもっている女子への配慮に欠けたことを反省していると話した．第1筆者からは良かった点として，配慮不足に気づけたこと，授業後に該当児童に励ましの声をかけることができたことを伝えた．その上で，チーム分けのアドバイスをした．

5月第2～3週

理科の授業を観察する．理科の授業は植物を観察して記録する内容であった．これまでに学習した方法で，植物の高さや葉の形や色，数などを観察してノートに正確に記録し，発表する授業であった．放課後の面談でAは，今日は子どもが観察し描くところで丁寧に指導することを主としたかったが，一人一人に時間をかけ過ぎてしまい，全員に指導ができなかったと報告があった．第1筆者は，決められた時間内に全員を同じだけ丁寧に見ることは難しいこと，その中でも声をかけた子どもに対しては丁寧な指導ができていたことを伝えた．その上で，巡視のポイントを助言した．

5月第4～5週

国語の授業を観察する．Aは，音読みと訓読みについて，耳で読みを聞いて意味がわかりにくいものとわかりやすいもので区別すると説明した．放課後の面談で，Aは児童がその説明で理解できたかどうか心配であると話していた．第1筆者は，板書の表記における区別がわかりやすく，またデジタル教科書を使用するタイミングがよかった点を伝えた．その上で，漢字は中国から伝わったものであり，その読みが音読みのもとになっていることもおさえておくことが，中学校の国語学習にもつながる系統性について教えた．

6月第1週

図画工作の授業を観察する．前時に探し選んだ，季節を感じる風景を，絵の具で表現する授業であった．描くことが苦手な子どもは，最初から拒否反応を起こすことがある．Aは，子どもたちに，上手く描けなくても気にせず，特に自分が気に入ったことに注目して描くことと，自分が使いたいと感じた色を使って自分らしさを表現しようと伝え，制作に取りかからせた．放課後の面談で，Aは今日の授業では何を一番に伝えて指導すればよいのかを悩んだと話した．第1筆者は，導入で上手く描こうと意識するよりも，自分らしさを表現できることが大切という説明ができたことは，描くことが苦手な子どもも躊躇することなく色を選び，筆を動かせていたことを伝えた．

6月第2週

Aは，専科教員が行っている音楽の授業を参観した．特別教室への移動に時間的な配慮が必要であることを理解し，休み時間に子どもに整列を促していた．リコーダーを演奏する授業であったが，Aは，運指がうまくできていないこどもへの対応が必要であると感じ，専科教員の許可を得て，できない子どもが練習している隣に付き添っていた．放課後の面談でAは，苦手意識をもち始めている子どもの練習に付き添い，少しでも吹けて嬉しいという気持ちを持たせたいと話した．第1筆者は，休み時間を少し短縮して教室移動を促したことによってスムーズに授業が開始できたこと，できる喜びを味あわせたいという教師の思いが教材研究をする際に生かされることを伝えた．

6月第3週

国語科の授業を観察する．自分が興味を持ったものについて説明と選んだ理由を文にまとめ，班で発表し合い，感想を述べ合う授業であった．放課後の面談でAは，子どもたちの作文が，自分が説明した構成に沿って書けていたことが嬉しかったと話した．第1筆者は，Aが作った例文が子どもたちが考えるときの参考になっていたと伝えた．

6月第4週

道徳の授業を観察する．子どもたちが人に感謝して言う「ありがとう」の一言がどんな意味を持っているのかを気づかせる学習である．放課後の面談でAは，第2時まで計画し時間に余裕があると思ってしまい，導入での自分の体験にもとづく話が長くなり，間延びしたのではないかとの反省し

ていた．第１筆者は，教員が体験を話すことは子どもたちに関心をもたせる良い方法であり，Ａが話している間，子どもたち全員がＡに視線を集中できていたことを伝えた．

７月第１～２週

道徳（第２時）の授業を観察する．教科書を読み，子どもたち自身がこれまで「ありがとう」を伝えたくなった場面を思い出し，今，自分を支えてくれている人に「ありがとう」を伝えるメッセージを考える内容であった．放課後の面談でＡは，子どもたちが具体的に誰のどんなことに対して感謝の気持ちをもったのか文字に表せたことに成長を感じたと話した．第１筆者は，教科書を読む際，Ａが子どもたちに「自分にもこんな経験はなかったか振り返りながら読もう」と指示したことがそれにつながったのではないかと伝えた．

７月第３週

国語科の授業を観察する．夏休みの宿題となる感想文の書き方について，Ａの説明のあと，それ以外に有効な書き方のポイントはないか班で考えさせた．子どもたちからは，感想文は苦手なので，どうすれば上手く書けるのかという質問が多く上がった．Ａは，うまくまとめようと思わず，自分が何を感じたかを書いていくことから始めようと説明した．放課後の面談でＡから，子どもたちはうまいと思われる感想文を書くことに気持ちが先行してしまっているが，どのように進めたら子どもたちの考え方を変えることができるのか質問を受けた．第１筆者は，班活動を使って感想文の書き方を考えさせたことは珍しく，子どもにとって多様な視点が共有できる貴重な機会となったと伝えた．その上で，うまく書こうと思うことは決して悪いことではないこと，子どもがこれなら書けそうと思うような，書く時のポイントがわかりやすい参考となる感想文を何点か用意し，それをもとに解説していくとよいことを提案した．

７月第４週

保護者会当日に留意することについて，全教職員に伝達した後，５年目以下の教員には再度おさえた．Ａには，現在は昨年度の反省を顧みながら取り組めているので，不安がらずに，気づいたことや対応したことについてはどんな些細なことでも必ず保護者に伝えることを忘れず懇談できれば大丈夫な旨，話をした．

また，第１筆者は通知表確認の際，付箋にコメントを書き，Ａに渡した．コメント内容「怒涛の１学期でしたね．〇年目となり，とても頼もしくなりました．生き生きと輝いているあなたは素敵です．テンポの良い子どもたちへの声かけ，業間に子どもたちとともに遊ぶ姿，ミッションの示し方，いいですよ！まだまだこれからも勉強することは続きますが，誠実さを忘れず，いろんなことにチャレンジしてほしいと思います．」

８月第２週

校内分掌では，体育科関係にベテラン教員とともに２名で携わる．昨年度の運動会において，学年の表現運動の企画から内容構成，子どもへの演技指導まで一手に引き受け，戸惑いながらも計画的に取り組み，無事に終えることができ自信をつけた．このときに見せた声の通り具合，端的でわかりやすい指示を見込み，先輩教員がＡを体育科担当に推薦した．Ａは，不安もあるが精一杯努めたいと話した．

運動会当日の保護者観覧について，PTA 役員と入念な打ち合わせが始まった．第１筆者はＡに，疑問は遠慮せずに議題に挙げ，自分がしなければと思うのではなく，役員とともに創り上げる気持ちをもつよう話した．また，この後の何度かの打ち合わせにおいて，Ａが役割分担を明確にし，ベテラン教員のアドバイスも受けながら学校側がするべき事項について立案，職員に伝える過程を丁寧に踏めていることをＡに伝えた．

８月第３週

今年度も学年の表現運動を任される．ダンスが特技でもあり，構成を考え，相担任に説明し，創り上げていく．第１筆者は，昨年度が子どもにも保護者にも非常に好評であったこと，自身が楽しく取り組む姿勢が相担任や子どもに波及することを伝えた．

８月第４週

Ａと２学期に向けて面談をする．どんなことにも前向きに真摯な姿勢で取り組めていること，やりたいことは同僚に相談しながら怖がらず自信を持ってやるよう伝えた．

② ２学期　学校行事における働きを中心とした観察

９月第１週

学期始めの学活の授業を参観する．Ａは，始業式で校長が２学期の目標を決めてそれに向かって努力してほしいと語ったことを受けて，目標を具体的に立てさせた．放課後の面談で第１筆者はＡに，担任が１学期を振り返り２学期にはどうなりたいのか具体的な指標まで考えさせたことは，子どもも担任も経過を意識しやすくなり達成しようという意欲につながることを伝えた．

９月第２～４週

運動会の練習が始まる．３クラス合同の学年練習を定期的に観察する．

担任の引率でクラス席から演技場所まで移動するとき，子どもたちが俊敏ではなかったため，Ａが声を荒げて指導する場面があった．放課後の面談でＡは，自分のクラスが遅くて焦り，他のクラスに迷惑をかけないか心配で思わず声を荒げてしまい子どもたちを委縮させてしまったのではないかと心配していた．第１筆者はＡに，俊敏に動くことは大事なことで焦る気持ちはよくわかると伝え，その上で，そんなときは一呼吸を置く，あるいは声のトーンを少し下げてみることを助言した．

学年全体を動かすことは経験があっても難しいときがあるが，Ａは，自分が構成した演技を適切な箇所で区切りながら，ポイントを押さえた説明をし，気になるところは励ましの声もかけながらやり直しをさせ，確実に完成に導いた．また，相担任の一人である初任の男性教員にも，Ａの目の届きにくいところを確認するよう指示を出せていた．放課後の面談で第１筆者は，Ａが楽しそうに取り組んでいることが子どもたちに伝わって子どもも笑顔になっていることと，第１筆者は何も心配していないことを伝えた．

また，この時期は運動会の練習が中心となるため，教科の授業がおろそかにならないよう気をつけなければならないが，Ａは，各教科各単元の重要事項をベテランの相担任から学び，授業に位置付けていた．第１筆者はＡに，それはとても大切なことであり，この先も意識し続けてほしい旨を伝えた．

当日，子どもたちは真っ直ぐに列をなし，隊列を整え，大きく機敏な動きで，見応えのある演技であった．翌日，Ａは第１筆者に，途中落ち込んだりすることもあったが，終始楽しんで取り組むことができた，子どもたちが頑張ってくれて嬉しかった，担当になってよかったと話した．第１筆者は，Ａが諦めず，最後まで明るく元気に全体指導ができたこと，子どもたちはこれまでで最高の演技であったことを伝えた．

10月第１～２週

他校の研究発表会に参加し，Ａと同学年の国語の授業を参観，事後検討会にも出席した．翌日に面談を行った．授業者の発問や立ち位置，視線等で気づいたことについて指導案への記入が見られた．事後検討会で出された，今後参考にできる内容についてもぎっしりメモが残され，今後，自分の授業で試したい部分について述べた．

後日，第１筆者は，Ａが実際に試している場面に遭遇した．Ａには，そのようにまずは積極的に実践に生かしてみることが大切であることを伝えた．

10月第３～４週

社会見学の事前指導では，見学先の特色と位置について，２時間かけて社会科副教材で見直し，事前に調べたことと質問したいことをしおりにまとめさせた．その時に，地図で確認できない子を一人ひとり机間指導し，全員が地図上で確認できるようにした．放課後の面談で第１筆者はそのことに触れ，できなかった子がその後は顔を上げて前を向くことができていたことを伝えた．

当日は，クラスごとにバスに乗り，各担任が車窓について事前に調べたことを説明していた．５年目以下かつこの学年を初めて担任するということで，やはり説明不足は否めなかったが，大切なポイントはおさえることができていたことを翌日の面談で伝えた．

10月第５週

２限目に１年生で人権学習の提案授業が行われ，放課後に事後検討会があった．授業について感想や意見を述べる場面では，Ａは挙手し全体の５番目に発言することができた．検討後にＡは，同年代の教員による授業ということもあり，良い

刺激を受けたと話した．第１筆者からは，Ａは自分のこれまでを振り返り，今後参考にしたいところを堂々と述べることができていたことを伝えた．また，参観と校内研修会では，研修主題と事前に提示された子どもたちにつけたい力を常に意識して臨むことが大切であることを確認した．

11月第１週

書写の授業を観察する．休み時間から準備をする習慣がついている．机上に準備ができていることを確認してから，「折れ」の説明に入る．放課後の面談でＡは，説明に時間を取り過ぎ，練習時間が少なくなってしまったことを反省していた．第１筆者は，時間配分は次回気をつければよい，それよりも習得することが難しい折れの練習に時間をかけたことは間違いではないことを伝えた．

11月第２週

学校全体で行う避難訓練と引き渡し訓練があった．放課後の面談で，昨年度よりもクラスの子どもたちが列を整え静かに待てたこと，保護者への引き渡しも焦らず落ち着いて確認できていたことを伝えた．

11月第３週

算数の授業を観察する．これまでに学んだ分数について振り返る内容であった．Ａは，まず事前に用意した段ボールで作ったピザの模型を使って説明した．

放課後の面談でＡは，視覚的な教具を使用することで，余分な言葉を使わず端的に説明するつもりであったが，必要以上に説明がくどくなり時間が掛かり過ぎてしまったと反省していた．第１筆者からは，手作りの教具に子どもたちが目を輝かせて集中していたこと，実際に作成して初めて気づくことがあり，教員がわかる授業を目指し時間をかけて考えた教具は，今後作成するときの参考にできることを伝えた．

11月第４週～12月第１週

マラソン記録会の準備と当日の運営に，体育担当として携わる．今年度からコースが変更となるため，各学年の距離とコースを決める作業に取り組んだ．ベテラン教員の指示を仰ぎ，早朝からともに準備に努めた．保護者の参観方法についても，PTA 役員と打ち合わせを進めた．第１筆者はＡに，運動会時より判断が迅速で迷いが少なくなっていること，同僚へも躊躇せず依頼できるようになってきたことを伝えた．

12月第２週

２限目に理科の提案授業（中学年）が行われた．授業者は理科を専門とするベテラン教員であった．放課後の面談でＡは，練られた発問，間の取り方，工夫された実験の方法や初めて知る実験道具など，大変勉強になったと興奮気味に話した．第１筆者は，良い視点で参観できている，以前のように試せることはどんどん試してみるよう伝えた．

12月第３～４週

全教職員に，保護者会では何か一つでも子どもががんばったことや輝いていたことを伝えてほしいと伝達した．翌日，Ａは，これまでで一番余裕をもって対応できたことと，子どもが輝いた瞬間を伝えたときその母親が「先生のおかげ」と微笑んでくれて嬉しかったと話した．

１学期に続き，第１筆者は通知表確認の際，付箋にコメントを書き，Ａに渡した．コメント内容「まだ着任して〇年ですが，体育担当として運動会やマラソン記録会を企画運営し，成功裏に導いてくれたことに心から感謝しています．ありがとう！ダンス指導も板について頼もしい限りでした．気になる子への支援等対策を考えたり実践してみたり経験を積んであなたがさらに成長していくことを楽しみにしています．」

③　３学期　学校全体に関わる取組を中心にした観察

１月第３週

Ａは年頭にあたり，学級で「一年の計は元旦にあり」を説明後に，３学期の目標を考えさせ，すぐに掲示していた．第１筆者は，学期始めに全職員に「新学期には子どもが具体的な目標を立て，教師は子どもの目標を覚えておき，折に触れ子どもに目標を意識して行動できているか声をかけてほしい」と話している．面談でＡに，それを毎回実践してくれていることが嬉しいことと，改めて目標の進捗状況を確認することの大切さについて伝えた．

１月第４週～２月第２週

校内研修に係る提案授業（５・６年社会科）に係る事前事後の検討会や参観が続く．事前検討会では，子どもの現状とつけたい力の関係について質問した．終了後の面談でＡは，授業者が両名とも５年目以下の同年代ということで，強い関心をもって参観や検討会に臨んだと話した．さらに，５年生担任がかなりの時間をかけて教材研究を行い，地域に関わる資料作成に向けて丁寧で地道な段階を踏んでいたことが子どもの理解を深めたと感じたこと，６年生では子どもたちの学習への前向きかつ真剣姿勢と参観者を温かく迎える学級の雰囲気に日頃の指導の成果を感じたことも加えた．第１筆者は，普段からの取組がとても大切であることと，Ａからもその積み重ねが感じられることを伝えた．

２月第３～４週

６年生を送る会に向けて練習が続く．今回は，ベテランの相担任がアイデアを出し，子どもたちが道具を作成，動きの練習に入った．一人一言ずつ呼びかけをするため，発声練習にも余念がなかった．Ａは，学年練習でも学級練習でも，口の開け方やテンポについてイラストや手拍子を用いたり，Ａ自身が見本になったりしながら進めた．面談でＡは，子どもたちのがんばりと成功に感無量であると話した．第１筆者は，突然に成功するのではなく，これまで指導してきた積み重ねが実を結んだ結果であると伝えた．

３月第１～２週

今年度は，保健主事として養護教諭とともに学校保健委員会にも出席し，校医である三師やPTA役員と意見を交わした．目に見える身体の不調ではなく，心に不安を抱える子どものことについても現状と今後の対応について協議に参加できた．また，防災訓練の事前学習では，用意された教材を用い，重要性について説明した．面談で第１筆者は，20代のうちに様々な経験を積めることは幸せなことと，重要性を説きながらＡが自身の災害時に対する思いも話したとき，子どもが一斉に顔を上げて聞き入っていたことを伝えた．

３月第３週

卒業証書授与式に向けた準備に，学年の中心となって取り組む．式後，Ａは，卒業式の重みと，それに携わっていることに責任感と充実感を感じたと話した．第１筆者はＡに，昨年度までとは違い，学年での活動において自分の分掌に責任を持ち，相担任にも協力を求めながら，自分の学級だけでなく学年全体を見渡して指導できるようになっていることを伝えた．また，入院している子ども宅へ，でき得る限り毎日家庭訪問をしていることも労った．

３月第４週

終業式を迎える．学級の子ども一人ひとりにメッセージカードを贈る．Ａは，子どもたちのがんばりを認め，担任とともに取り組んでくれた感謝の気持ちを伝えたいと，それぞれの一年間の細かながんばり（窓の桟の掃除等）を認めたメッセージを書いた．同日，来年度の大まかな構想について全教職員に周知した．面談でＡは，担任としてのやりがい，管理職を含む先輩教員への感謝の気持ち，来年度も与えられたところでがんばりたいという旨を述べた．第１筆者は，今年度のＡの実践の中で特に印象的であった取組をいくつか挙げ，来年度も期待していることを伝えた．

第１筆者からＡへ，最終コメントの内容「〇年目にして，学校運営の一役を担うまでの成長を見せてくれました．これまでとは全く違う体制で実施せねばならなかった運動会．担当として知恵を絞り，考えに考え，提案してくれた．当日の最後の片付けまで，気を抜くことなくやり遂げてくれた．学級経営でも，学校として必要なことを確実に伝えてくれていた．今，子どもたちはみんな，先生の言葉に耳を傾け，メリハリのある行動ができている．すばらしいよ．来年度は，自分が課題に思っていることに前向きに取り組んでください．さらなる成長を楽しみにしています．」

（２）対象者との面談及び関係者からの聞き取り調査

①　Ａの発言及び記述表記から

・困ったときに同僚の先生方に相談することは，これまで遠慮や恥ずかしいという気持ちがあって躊躇することが多かったが，第１筆者から，あの場面で隣の担任に応援を求めたこ

とは非常に良かったと言われ，自分もそうしてみて安心できたことがわかり，徐々に相談できるようになってきた．

・保護者対応は，第１筆者に言われたように，先に子どもの良い面から話し始めると保護者からも悩みや子どもに対する不安など多くの事を聞くことができて嬉しかった．

・第１筆者から，子どもたちを思う気持ちがあれば子どもにも保護者にも伝わる，伝え方も大切なので学んでいくとよいと聞いてから，先輩方の電話対応等に耳を澄ませるようになった．

・自分でも実践中によくわからなくなったとき，第１筆者に良いところを見つけて言っていただくのが非常に嬉しくやる気になった．

・自分は，第１筆者からほめられると嬉しい気持ちになる．ほめられて嫌な思いをする人はいないと思うので，子どもたちにもできれば一日一回良さを伝えることを目指そうと思う．

・自分で良いところがわかると，気持ちに余裕ができた．

・この仕事に就くという夢が叶って幸せに思っていたが，慣れないことや疲れることや辛いことがあり，この仕事が自分に合っていないのかと悩むこともあった．しかし，面談で話を聞いていただいたり，常に良さを認めてくださることで少しずつ自信がもてるようになった．そして，授業や行事に取り組んだり，子どもたちと過ごすことが楽しくなっている自分に気が付いた．

・定期的な面談を続けてほしい．管理職からの言葉がけがほしい．

・第１筆者からの言葉「謙虚に誠実に」を忘れず，次年度も邁進していく．

・自分の弱いところを克服していきたい．

・次年度になり，辛いときは第１筆者からの付箋のコメントを読み，その言葉に支えられ，がんばることができている．

②　関係者からの聞き取り調査から

（教頭）：もともと子どもに寄り添い，ともに歩む姿勢と授業等における指示の出し方には定評があったが，遠慮がちであることと自信のなさが気になっていた．しかし，この１年で，他教員に相談し助言を求める姿や，初任者教員に指示を出したり，アドバイスをする姿などが随所に見られ，頼もしく感じている．

（ベテランの相担任）：子ども対応や授業中の声かけ，同僚との協調性等教師としてのセンスをもった教員である．しかし，昨年度の件があってか遠慮がちになったように感じていた．今年度は元気で明るいＡの本来の姿が戻り，学年の活動にも名乗りを上げ，先頭に立って企画運営に携わってくれることが多くなった．私の助言も素直に取り入れる姿勢に共感をもった．的確な補佐もしてくれた．Ａと相担任をできたことに感謝している．来年度も相担任を希望する．

（初任の相担任）：着任〇年目で，ここまで全体の業務に中心となって関われることを尊敬する．私に言いづらいことも，それでは全体の迷惑になると注意してくれたりすることもあった．感謝している．来年は少しでも補佐できるようにがんばりたい．

（地域ボランティア代表）：初任の時から，明るく笑顔で対応してくれる．ボランティアが活動しやすいように声かけもしてくれる．ただ，昨年度，元気のないときがあり心配し声をかけたら，自分が反省したことについて話してくれた．今年度は，徐々にＡ本来の積極的な姿が見られるようになってきた．地域が関わる作業にも率先して参加してくれた．今後もＡらしさを出して，がんばってほしい．

上述の関係者から聞き取ったことをＡに伝えたところ，Ａは「それを聞いてとても嬉しい．がんばってきて良かった．自分だけでは何もできなかった．面談で励ましていただいたり，先生方が支えてくださったおかげ．次年度も自分にできることを考え，学校のため，何より子どもたちの力になれるよう頑張る」と答えた．

４．考　察

本研究は，１年間，校長による肯定的な言葉がけによって，若手教員の指導力がどのように向上

するか検討した．その結果，校長の定期的な面談により，Ａの気持ちと行動の変化，指導力の向上が以下のように認められた．

第１に，第１筆者との面談で発せられたＡの言葉を抽出してみると，１学期は，「できなかった」「心配」「反省」「どうすればよいか悩む」などネガティブな発言が目立った．２学期は，「楽しむ」「嬉しい」「余裕をもつ」などプラスの感情を表す言葉や，「～したい」「どうすればよくなるか」「刺激を受けた」「勉強になった」など向上を求める言葉，「（児童に）成長を感じる」など子どもを肯定的にみる言葉が発言されるようになった．そして，３学期には，「責任感」「充実感」「成功」「がんばり」「自信」などやりがいにつながる言葉を発していた．また，行動面において，中心となり進める分掌が増えたが，面談の中でもその都度そのことに触れ，諦めることなく，同僚やPTAと協力しながら完遂することができた．

第２に，関係者の聞き取り調査より，Ａの変化を表す言葉を抽出すると，「頼もしい」「的確」「感謝」「尊敬」「積極的」「率先」「本来の姿，Ａらしさが戻る」が挙げられる．

これらの結果から，管理職が定期的に常に肯定的な言葉をかけたことにより，Ａが学期をおうごとに，否定的な言葉や行動が減少し，肯定的な，前向きな言葉や行動が増加していった．このように管理職が継続的に若手教員と関わることによって，若手教員の意欲向上につながったと言えよう．また，関係者の聞き取り調査の結果をＡに伝えたとき，Ａの喜ぶ様子から，直接聞くよりも第１筆者のような仲介者を通して知ることも，本人の意欲向上につながることも明らかになった．そして，認められる言葉がけに加え，「感謝されている」「役に立っている」ということがわかる言葉がけも意欲向上につながると考えられる．国立教育政策研究所（2015）は，児童生徒にとって，「他人の役に立った」「他人に喜んでもらえた」という自己有用感を向上させることは重要であると述べており，教員にとっても自己有用感を育む管理職の取り組みが重要であるということが明らかになった．

第１筆者は，Ａの具体的な行動について肯定することを意識的に実践していた．伊藤（2017）は，成人においても，ほめるのであれば，具体的に，本気でほめることが大切であると述べており，本研究でも実践できたと推察される．ほめられることが苦手な教員，懐疑的になる教員，それはできて当然であるということをほめられても嬉しくないと思う教員も存在するため，伊藤（2017）の視点は重要であり，むやみやたらにほめるのではなく，対象者の特性や背景を捉えて言葉がけをすることも必要であると考えられる．

また，以前，第１筆者が若手教員に対して，聞き取り調査を行った結果，できていないところを明確に指摘されることを望んでいる若手教員もいた．その理由として，「自分が成長したいから」「そのままでは子どもにしわ寄せがいくから」などと語っており，指摘されるだけではなく，今度どうすればよいかまで教示してほしいということであった．

これらより，自信をなくしている若手教員には，肯定することから始め，状態を見て，「ここができていない」といった否定ではなく，本研究で第１筆者がＡにかけた言葉のように，「こういうこともできる」という肯定的な言葉を用いて，指摘事項として伝えていくことが重要であると考えられる．また，指摘されることを望んでいる若手教員への伝え方については，詳細に検討していく必要があるだろう．

南（2017）は，子どもを「ほめること」の役割として，「自己肯定感を育む」ことと「方向性と評価基準を示すこと」を挙げている．教員にとっても，管理職からほめられることによって，自己肯定感を育み，また方向性と評価基準を示されることは重要であると言えるだろう．これらは，一学校の教職員集団の中で適応していける力を身につけることに関係すると思われる．

今後は，一般の人々や児童生徒の自己肯定感を高めることの大切さや方法などが記された文献等を研究し，教員の自己肯定感を高める方策に特化した研究を進めていく必要があるだろう．また，本研究は，１人の若手教員に焦点をあてて，その若手教員が指導力を向上するような管理職の関わりについて検討したが，子どもと同様，若手教員も多様な考えや価値観をもっているため，その教

員のパーソナリティを理解して，関わり方を考えていく必要があるだろう．

引用文献

伊藤美奈子（2017）．もっと叱ってほしい，もっとほめてほしい－先生に「かかわり」を求める子どもたち　児童心理，8，1-10.

国立教育研究所（1999）．学級経営の充実に関する調査研究　平成10・11年度文部省委託研究中間報告.

国立教育政策研究所（2015）．生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」？

片倉徳生・三上勝夫（2021）．「学級経営の困難な状況」に関する一考察－特に学級経営の困難な状況の構造化と予防的対応策に関して－北海道文教大学論集，22，15-27.

南惠介（2017）．子どもの自己肯定感を育てる「認める」指導　総合教育技術，7，30-35.

文部科学省（2021）．令和元年度学校教員統計調査（確定値）の公表について.

The Study for the Improvement of Leadership Qualities in Young Teacher : through the Records of Positive Words in Principal Teacher

HATTORI Naomi ・ WATANABE Kenji

Abstract: The purpose of this study was to investigate the effective support and leadership methods in principal teacher. That is because young teacher had worthwhile in the work as teachers and practice teaching methods and classroom management with confidence. The first author had regular interview the young teacher. The first author always spoke positive words though one year and observed the change of the young teacher. The young teacher changed words on each interview. During the first semester, he had many unconfident words. During the second semester, he had the words of positive feeling, aiming improvement and positive observation against children. During the third semester, he had worthwhile words. Other teachers also talked he had the confident behavior and contribution against teachers. These results clarified that the principal teacher regularly and always gave the young teacher positive words, and the young teacher got confidence and increase of motivation.

Keywords: positive words, principal teacher, leadership qualities, young teacher